

サボ通

サボ通は、認定NPO法人さばえNPOサポートが自主発行している機関紙です

さばえNPOサポート通信

Vol.35 & 36 合併号

発行日 ■ 2020年03月31日

発行 ■ 認定NPO法人

さばえNPOサポート

編集 ■ 広報委員会

コロナと差別と 正義の味方

Korona to Sabetsu to
Seigi no Mikata

■「コロナが憎い」

新型コロナウイルスの感染によって亡くなった、国民的コメディアンの志村けんさん。

子どもから大人まで、絶大な人気を誇った才能が失われたことを惜しみ、同じドリフターズメンバーの加藤茶さんは「日本の宝を奪ったコロナが憎いです。」とのコメントを発表しました。

いち視聴者としての自分には察して余りありますが、仲間を、また、唯一無二の才能そのものを取り返せないことへの悔しさが、その言葉に込められていることを強く感じました。

もしかすると、“殺人犯”が目に見えない極小の存在だったことは、残された者が感じる理不尽さをより大きくするのかもしれません。

持っていきようのない怒りや、やるせなさといったものまでもが、その「憎い」の言葉に凝縮しているようにさえ思えます。

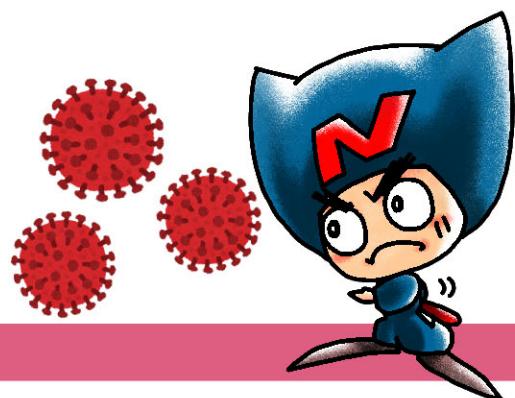
日本では昔から、ウイルスによる感染症のいくつかは、他の細菌などによる感染性の病気とともに「はやり病（やまい）」と言われることがありました。

まだ科学で“姿”を確認できなかった時代、その“振る舞い”は人知を超えた鬼神にも思えたのでしょうか。

全国各地に、そのような病を引き起こす“疫病神（やくびょうがみ）”を祀り、人々に災いをもたらさぬよう祈る神社や祭りが、たくさん存在しています。

今では、その原因がウイルスや細菌であることはわかっていますが、その大規模な感染が社会にもたらす影響は、ある種の“神”的に人々の都合を全く無視し、全世界にまんべんなく降りかかろうとしているようです。

今号のサボ通では、手に余る題材なのは承知の上で、今回の新型コロナウイルス禍が、我々の市民社会に「突きつけたもの」について、少し考えてみたいと思います。



■ウイルスという“試金石”

もし、自分自身が恵まれていて、今すぐに命や生活を奪われる危険がなかったとしても、少し想像するだけで、新型コロナの影響が、社会のあちこちに暗い影を落とした事実は疑いようがありません。

命や健康、経済、様々な社会システムへのダメージはもちろんですが、今回の“災い”があまりに身近に感じられたために、いくつかの通常では考えられない「出来事」を、自分を含めた多くの人たちが違和感なく“許容”していることに、ふと思い当たりました。

それは、ウイルスそのものが手を下したというよりは、ウイルスの脅威を目の当たりにした私たち自身が、心の底に沈めて意識していなかった歪みのようなものを、はからずも表に浮かび上がらせたように見えます。

特定の意図もなく、コミュニケーションも取れず、忖度もないウイルスは、確かに鬼神のように振る舞います。

その影響は、まるで人や社会の本質をあぶり出す「試金石（しきんせき）」のように、私たちが今まで組み立ててきた社会や価値観の“弱点”に、正確に目印を付けていきました。

その最初のひとつが、「クルーズ船の隔離措置」だったのではないでしょうか。

次ページへ→

■閉ざされた豪華客船

2月上旬、横浜港に停泊した状態で隔離・検疫の長い時間を過ごすことになったダイヤモンド・プリンセス号。

今思うと、それがかなり前のことのようにも感じるのは、その後、新型コロナウイルスの感染に関わる出来事が、あまりにも多く、それも波状攻撃のように何度も何度も押し寄せてきたからかもしれません。

あの時、多くの日本人が、まだどこかで“対岸の火事”としてとらえていたようにも思える豪華客船の災禍。

船内での的確な防疫体制が取られていたか、クルーズ船を所有する会社や行政が正しい対応を出来ていたか、状況認識の甘さや初動での過ちがなかったか…

色々な視点から、様々な問題点や、逆に成果を主張する意見があることも承知しています。

ただ今回は、決してこの客船の現場に関わった行政や企業の動きへの、「賛否」や「評価」を話題にするつもりはありません。

それよりも、自分も含めた多くの日本人が、この時の「隔離」の状況を、どんな“気持ち”で受け取っていたのか…そんなところに、こだわってみたいと思います。

■どこか実感のないまま

TVやネットの画面を通じて目にする巨大な客船。

4000人近くの乗客、乗員、そして、支援や検疫作業に関わる人々。

表に出てくる情報は十分ではなく、“漠然とした不安”はあるものの、最初のうちは「このまま、どうにか収まってくれるといいなあ…」という気持ちで事態を見つめていたのを憶えています。

ところが、日を追うにつれ、船内で確認される感染者の数は増えていく。

一部の乗客から、船内の自室待機状態でのSNS発信などもあり、その過酷さがじわりじわりと伝わってきます。

「このままでは感染するんじゃないかな。いや、既に感染してしまったのかもしれない。」そんなストレスを抱えた生活を強いられている“内部の人たち”的な状況に痛々しい気持ちを重ねながらも、このあたりから、自分自身の心の中に、ある種の安堵感のようなものが頭をもたげていることに気がつきました。

「ああ…でも、遠くで起きてることで良かった…」

それは、このクルーズ船での感染を、もしかすると他の多くの日本人と同様に、自分とは“別世界”的な出来事として、切り離して受け取めていることの証拠でもありました。

■安心感と「正常性バイアス」

2019年の台風被害時などにもマスコミで扱われ、かなり一般にも知られるようになった心理学用語があります。

『正常性バイアス』

少し乱暴に説明すれば、「災害時などに、被害が及ぶ

可能性がある状況でも、「自分は大丈夫、関係ない」と、不都合な情報や選択肢を過小評価する心理的なバイアス(偏向・かたより)」のことです。

もちろんそれには、自分で抱えきれないようなストレスを軽くする作用もあるわけで、命に関わる状況でなければ、そのバイアスにも意味があるのかもしれません。

自分も含め、人は「自分とは関係ない」と思うことで安心感を得ることがあるものです。

先ほどのダイヤモンド・プリンセス号の話も、“別世界”での出来事として思うことは、心の平安を維持するためには“健康的”な動きだと解釈できます。

ただ、考えてみてください。

もし、乗客からのSNSの発信もなく、数字だけの「感染者数」「死亡者数」情報だけが、マスコミやネット上の報道に積み重なっているだけだったら…

当時、まだ“別世界”に住んでいた私たちの多くは、もっと“人ごと”として、まるで統計グラフを見るような無慈悲さで、事態を眺めていたかもしれません。

そして、もう少し考えてみてください。

“人ごと”として眺め続けることは、身近に迫る現実への感度を鈍らせ、ウイルス蔓延を阻止するためには、むしろマイナスなのだろうということを。

そして、国内でも感染が広がり、ダイヤモンド・プリンセス号の出来事が、実は“自分と同じ世界”で起こっていたことを突きつけられた後も、私たちは、まだ違う形で、自分を“別世界”に置こうと必死になってはいないでしょうか。

■切り分けと排除

言うまでもなく、既に日本国内でも新型コロナウイルスの深刻な影響は認識され、ウイルスと同じ世界で人が生活するための対処方法が官民間わざに発信され、また、実行されています。

万が一の場合、命を落とすかもしれない感染症の広がりは、私たちの防衛本能を刺激しました。

「何があっても感染(うつ)りたくない。」

そう思うのは当然でしょう。

そして、感染した人、地域、人のつながりを“異物”として遠ざけ、排除しようとする。

それも不思議ではありません。

不思議ではありませんが、あるウイルスを完全に撲滅することは、毎年のように変異して流行するインフルエンザを例にとるまでもなく、決して簡単なことではないようです。

ある程度時間をかければ「ワクチン」などの対抗手段も完成されてくるはず。そんな希望にすがりながらも、目の前の危険をどうにかしたい…

そんな時、私たちは、他人に対してかなり攻撃的になってしまふ傾向があるのかもしれません。

その第一歩が「あの人と自分は違う」と信じ、徹底的に「攻撃」し、排除する方法だと思えるのです。

■ 攻撃は真実を隠す

県内で最初の感染者が確認された時、少なからず衝撃を受けた人は多かったのではないでしょうか。

そして、自分や身近な人たちに危険をもたらすかもしれない“その人”に、無意識に敵意を持った人もいたかもしれません。正直、自分にもそんな感情が全くなかったかと言えば嘘になります。

そして、その後に確認された感染者の皆さんにも、「可哀想に」という同情とともに「なんてことをしてくれたんだ」というネガティブな感情を抱いた人は少なからずいたのだろうと想像します。

それは一時期クルーズ船の関係者に抱いた“別世界”感とは違う、一種の「蔑(さげす)み」、あるいは「差別」に近い意識だったのかもしれません。

特に、インターネットの世界は、そういう感情に敏感に反応します。

情報の発信も蓄積も共有も得意とするインターネット、特にSNSの世界では、昔なら表に出なかったひとりひとりの内面の価値観が、あっという間にネットワーク化します。

偽りのものも含め、個人の尊厳を破壊するような情報が形になり、ネガティブな評価を受けた対象者や関係者には、“現実”としての「攻撃」が降り注ぐ…

ここで具体的な例を示すのは控えますが、その動きは、実際に感染した患者さんやその家族だけでなく、感染を食い止めようとして努力する医療従事者や、その子どもさん、家族などにも及びました。

むき出しの「攻撃」は社会的圧力となって強い萎縮効果を生むものです。

マスコミの報道によれば、感染ルートを追うための当局の質問に対し、近しい人が「攻撃」されることを心配して、患者さんが情報の提供を拒むこともあるようです。

また、多少の体調不良であっても、社会的な「攻撃」を恐れて検査を受けず、知らないうちに誰かに感染させてしまったり、自分やまわりの人の命を危険にさらしてしまう患者さんを増やす可能性も高まります。

「寛容さ」のない場所には、「嘘」が育ちます。

これは、感染症対策に限ったことではありませんが、過剰に「許さない社会」は、真実を覆い隠し、本来、社会全体で見据えなくてはいけない方向性や対処方法を、大きく歪めてしまうリスクがあると言うことでしょう。

では、その差別的な意識、攻撃性みたいなものが肥大化する原因是、どこにあるのでしょうか？



■ 「正義は我にあり！」

常識的な人であれば、自分が“うしろめたい”と思っていることを大声で主張したり、堂々と実行することは普通なかなかできません。

歴史上には、それが可能だった指導者もいそうですが、そんな人物であっても、きっと「自分は正しい」と信じ込んでいたか、そう信じ込むように真実から目を背けたりしていたのではないかでしょうか。

そうでもなければ、そんな指導者の「言葉」で、多くの人々が影響を受けるとは思えません。(もしかすると、今の時代なら強大なマーケティングによって可能なかもしれません…)

何を言いたいのかと言えば、社会を切り分けて、相手側を「攻撃」する人の多くは、「自分は間違っていない。」「自分こそが正義だ。」という強い意識に支えられているのではないかということです。

実は、これは「攻撃」だけに限らず、今回のコロナ禍の中でも話題になった「ニセ情報(デマ)の拡散」にも共通するものでしょう。

“よかれ”と思ってみんなと共有した嘘の情報がトイレットペーパーの買い占めを誘発し、それを金儲けにつなげようとした一部の“テンバイヤー”や業者が品不足に拍車をかける…これはデマから生まれた悲劇のひとつでした。

中には、自分の間違った情報拡散に責任を感じ、謝罪をする人もいましたが、それを許すことなく断罪する人もいて、これはさらなる悲劇と言えるかもしれません。

日本では、基本的に私刑(リンチ)は憲法で許されていないので、罪を断じて罰する行為は警察や検察、裁判所などの役割なのですが、自分が「正義の代弁者・代行者」であれば、本人には躊躇(ちゅうちょ)する理由はないということなのでしょう。

物語では、よく“正義の味方”が、法の枠を超えた行動で“悪”に鉄槌を下すシーンがあります。

自分も含め、視聴者はそこに期待し、快哉(かいさい)を叫ぶのですが、現実の世界では、そう簡単ではありません。

なぜなら、ある人の「正義」は、必ずしも、みんなの「正義」とは限らないからです。

■ “正しさ”的に失われる命もある

ある国に侵略した軍隊と、それを迎え撃つレジスタンス。戦争映画やSFによくある設定ですが、主人公がどちらに所属するかによって、その描き方や感情移入は、文字通り180度変わります。それはつまり、信じる「正義」が、価値観や立場によって違う可能性があるということです。

だから「正義の味方」がどうあるべきかの前に、いろんな視点で「正義の見方」を考える必要があるかもしれません。

命を守ることは、人類共通の「正義」だと思う人もいるでしょう。自分もそう考えますが、例えば戦争では、それぞれの「正義」のために、その命すら犠牲にします。

今回のコロナ禍を“戦争”に喩える人もいます。ただ、「命を最優先にすることが一番大切」という意味で、自分はその表現は使わないようにしています。

→前ページから

そしてもちろん、「正義」の違いは、別に国家間の争いに限ったことではありません。町内会や職場や学校、そしてもちろん、家庭にもあるものです。

少し視野を広げれば、市民を中心としたコミュニティのあり方、例えば「地域自治」や「民主主義」といった考え方の前提もある意味、この多様な「正義」を認め合うところから始まっているとも言えるのではないでしょうか。

■自分に出来ることは何だろう

現在、学問の世界でのウイルスは「生物と無生物の境界的存在」という解釈が主流だと聞いたことがあります。

どちらにしても、ウイルスが「正義」の概念や独自の「価値観」を持っているとは考えづらいでしょう。

ウイルスのもたらす耐えがたい現実に対処することはもちろん必要ですが、今、本当に問われているのは、私たちがここしばらくで作り上げてきた「社会」に浮かび上がった綻(ほころ)びに、どう対処するのか…なのかもしれません。

新型コロナを「敵」として、完全に打ち負かし無害化できるのなら、それはそれでありがたいことでしょう。

でも、それが比較的短い期間内に、それも地球規模で達成できないのであれば、自分たちがコントロールできる部分を見直して、策を講じていくことが大切です。

感染の現場では、今日も命をめぐるギリギリの努力が続けられています。

そんな中、私たちが出来ることは何でしょうか。

それは、ひとりひとりの状況によって違うはずです。

例えば、自分の健康も、他人の健康も損なわないよう、できる限りの注意を払いながら、それでも自分を追い詰めすぎないで、それなりの生活を送り続けること。

例えば、本当に感謝すべき人たちを見極めて感謝をし、本当に信頼すべき人を見極めて出来る範囲の支援を提供すること。

感染をした人であれば、生き延びること、そして健康を

回復すること自体が、まわりの人や、携わった医療従事者の皆さんのが幸運につながるはずです。

現時点では、まだ新型コロナウイルスの特性は解明できていませんが、健康になることで抗体を獲得できたことが確認されれば、回復自体が社会全体のウイルス対応力を高めることになるはずです。

できることなら、そうやって自分の命を危機にさらして回復してきた人に対して、せめて「よかったね」のひと言をかけられるくらいの気持ちでいたいと思うのは、自分だけではないでしょう。

患者さんの中には、納得出来ない行動を取った人もいるかもしれません。それはそれで、別の機会に議論をすればいいことだと割り切って、少なくとも、誰かの命や健康が失われなかつたことを喜べるくらいの人間ではいたいものです。

また、もしかすると患者さんの行動が、誰かの命を危険にさらしたり、失わせてしまった場合もあるかもしれません。

でも、その責任は、本人が自分で痛感し、背負っていくもので、決して被害者(もしくは、その関係者)以外が、責め苦のように指摘するものではありません。

そして、もし可能なら、新型コロナ禍が収まった時、どんな社会で生きていたいか想像し、そこに近づけることを忘れないでいたいなら、このウイルスによる危機的状況も、いつか無駄ではなかったと振り返ることが出来る気がしています。

危機は、人の本性をさらけ出させると言います。

そしておそらくは、私たちの社会の本性も同じです。

気に入らないものを“別世界”に閉じ込めて安心したがることも、誰かを自分より劣り、正義を邪魔する者として「攻撃」することも、その本性の一部なのでしょう。

今私たちは、新型コロナという大きな“鏡”的の前で、自分たちの“本当の姿”を見せつけられているのかもしれません。

はたして私たちの社会の姿は、自分の思っていたものとかけ離れていたりしませんか?

<おしまい>

NPOのための新型コロナウイルス対応お役立ちサイト

- 新型コロナウイルスの影響は、もし感染者数が減っていったとしても、長丁場になる可能性があります。
- さばえNPOサポートも賛同人として名をつらねた、民間連携の市民活動応援サイト。団体運営や資金調達の情報満載です!

<https://stopcovid19-for-npo.jp/>



鯖江の市民活動情報ブックレット

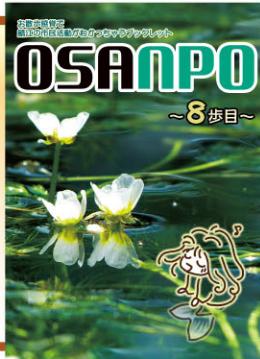
OSANPO ~8歩目~

■A4版・20頁・総天然色

■ご希望の方は「さばえNPOセンター」まで(無料)

■PDF版も公式サイトで公開中!!

【紹介団体】NPO『みるみえる』/豊シニアエージクラブ/
36project協議会/認定NPO法人福井県子どもNPOセンター



広報サポーター募集中!!

★簡単なお手伝いでもOK。個性的な仲間が揃っています
詳しくは、さばえNPOサポート事務局・松田まで。

編集・お問い合わせ

認定NPO法人 さばえNPOサポート

〒916-0024

福井県鯖江市長泉寺町1丁目-9-20 鯖江市民活動交流センター内

TEL:0778-54-7055 FAX:0778-54-7058

【メール】info@sabae-npo.org

【ホームページ】http://www.sabae-npo.org